

## 『ごはんはまだかね?』

配役：嫁「〇〇」（介護者）、  
姑もしくは舅「おばあちゃん」「おじいちゃん」（認知症）  
解説者

嫁、姑出てくる

【姑】「ああ、おいしかった。せつ子さんの手料理はいつもおいしいね。つつい食べ過ぎてお腹いっぱいだよ」

【嫁】「良かった。褒めてもらえると作りがいがあるわ。」

【姑】「どれ部屋で少し昼寝でもしてこようかね。」

姑、立ち上がり出て行く。

嫁、テーブルで編み物を始める。

しばらくし姑出てくる。

【姑】「せつ子さん、お昼ごはんはまだかね?」

【嫁】「あら、今食べたばかりじゃないの。お腹いっぱい食べたでしょう? 忘れたの?」

【姑】「いや、食べてない。」

【嫁】「食べたわよ。おばあちゃんもお腹いっぱいって言ったじゃない。」

【姑】「いや食べてない。昼飯を食べさせない気か? 飢え死ににさせようとしているのか。食べたなんて嘘ばかりついて! 何て嫁なんだ!」

【嫁】「本当に嫌になってしまうわ。食べたか食べていないか覚えていないんだから。」

【姑】「なんだと! 飯もたべさせないひどい嫁だ!」

【嫁】「今食べたばかりなのに、いつもこうなんだから。」

【姑】「もういい! 自分で作る!」

【嫁】「今食べたばかりでしょう?!」

【姑】「食べていない!」

【嫁】「食べたでしょう!」

【姑】「食べていない!」

【嫁】「食べたでしょう!」

【嫁・姑】「もうイヤになってしまう」

### 『解説』

これは認知症の代表的な症状の1つです。記憶障害で覚えることが出来ない、忘れてしまうのです。比較的最近の事から忘れていきます。誰でも昨日の夕食に何を食べたかを覚えていないことはありますが、夕食を食べたこと自体は覚えています。

認知症の場合は「体験の喪失」と言って、食べたこと自体を忘れてしまうのです。誰でも体験していないことをしたと言われれば相手が嘘をついていると思ってしまう。そして、それが繰り返されれば「悪い人」「悪い嫁」になってしまうのです。

しかし、そんな認知症の方でも、昔のことはよく覚えていて、子供の頃のことや子供を育てている頃のことや昔ながらの習慣などについては、楽しくお話ししてくれます。ですか

ら、認知症が進み意思疎通すら難しくなっても、子供の時に覚えた唄は唄えるなんて事があるのです。ではこのお昼ごはんを食べたことを忘れてしまったおばあちゃんにどのように対応したら良いのでしょうか。続きをご覧ください。

姑、出てくる。

【姑】「せつ子さん、お昼ごはんまだかね？」

【嫁】「あら、さっき食べなかったかしら？」

【姑】「食べてないなあ。」

【嫁】「そうでしたか。私ったらうっかりしていたわ。」

「今から急いで作るわね。出来るまで少し時間がかかるから、おばあちゃんお茶でも飲んで待っててね。」

「何かお茶菓子でも食べますか？おせんべい？」

【姑】「いや、お茶だけでいいよ。」

嫁、お茶を注ぐ。

姑、お茶を飲む。

【姑】「あ～おいしかったよ。」

【嫁】「じゃあ、おばあちゃんご飯の仕度が出来たら呼ぶからね。」

【姑】「そうかい。いつもすまないね～。じゃあ部屋でちょっと寝てるよ。」

#### 『解説』

覚えていない、記憶できない認知症の方に「さっき食べたでしょう」と言っても、思い出すことも、理解することも出来ないのです。ご本人の訴えを素直に聞き入れ、受け入れることが大切です。そうすることで、介護者（家族の方）も感情的にならずに接することが出来ます。

こういった認知症の症状である記憶障害は、家族の方を苦しめますが、記憶することができない認知症の方も、常に不安と混乱の中で生活しているのです。